

シカゴ大学時代のエラ・フラッグ・ヤング (Ella Flagg Young) (I)

中野 真志

生活科教育講座

Ella Flagg Young during University of Chicago (I)

Shinji NAKANO

Department of Living Environment Studies, Aichi University of Education, Kariya 448-8542 Japan

エラ・フラッグ・ヤング (Ella Flagg Young) は、本小論での彼女の来歴が示す通り、50年以上にわたり、シカゴの教育的事業に貢献し続けた優秀な実践家と管理職であり、大学の教員、そして教育行政官でもあった。特に、50歳になってからシカゴの副教育長の職を続けながら、ジョン・デューイ (John Dewey) のもとで研究を始めたことに興味をかきたてられる。

アメリカでの彼女に関する主要な先行研究としては、1916年のJ.T.マクマニス (John T. McManis) 著『エラ・フラッグ・ヤングとシカゴ公立諸学校の半世紀』(Ella Flagg Young and a Half-century of the Chicago Public Schools)、1971年のR.V.ドナテリ (Rosemary V. Donatelli) 著「教育的事業へのエラ・フラッグ・ヤングの貢献」(The Contributions of Ella Flagg Young to the Educational Enterprise)、1979年のJ.K.スミス (Joan K. Smith) 著『エラ・フラッグ・ヤング—ある指導者の叙述—』(Ella Flagg Young: Portrait of a Leader) 等がある。

しかし、我が国においては、ヤングに関する研究はほとんどない¹⁾。筆者は、教育者としてのヤングの様々な経歴から、彼女が、今日、我が国における教員養成の高度化に向けた教育政策と教育改革に対して示唆に富む歴史研究の対象であると考えてきた。すなわち、教育における理論と実践の関係、教員の資質・能力、教師の実践的力量的の向上、学校における管理職のリーダーシップ、教育行政の在り方などを視野に入れながら、ヤングの教育実践、教育思想、および、教育理論等の経緯と変容を詳細に考察する必要があると思われる。

本小論はその研究の一環であり、シカゴ大学時代のヤングに関して論じる。しかし、この時期におけるヤングの教育に関する思想と理論が、どのように変容し発展していったのか。それらを解明するためには、シカゴ大学における彼女の多様な立場、大学の学生、大学教員、デューイ・スクールのスタッフ、『初等学校教師』の編集者としての立場を論じた上で、彼女が取

り組んだ研究、博士論文、他の執筆物を詳細に考察する必要があると思われる。限られた紙幅の中で、それら全てを取り扱うことができないと思われるので、本小論では、まず、彼女の経歴について述べた後で、シカゴ大学における彼女の多様な立場について論じる。

I E.F. ヤングの経歴

エラ・フラッグ・ヤングは、1845年1月15日にニューヨークのバッファローで生まれた。労働者階級である両親、セオドア・フラッグ (Theodore Flagg) とジェーン・フラッグ (Jane Flagg) の3番目の子どもであった。フラッグ家はキリスト教長老派であったが、教条主義的ではなく、トランプ遊び、演劇、ダンス及び当時の文学作品も認めていた²⁾。

エラは繊細で病気がちな子どもであったので、学校に通わずずっと家にいたが、彼女は、読み書きがよくできた。そして、10歳になる頃までに、聖書のマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四福音書、コリント人への手紙、および、詩編のほとんどを覚えていた。11歳の時、彼女の兄と姉が通っている近くの学校に通うのを許可された。彼女は特に数学に興味をもち、その才能があった。助教 (monitor) となり、教壇にある教師の隣の机が与えられ、日々の授業を教えた。

1858年、13歳の時、エラは、家族とともにニューヨークのバッファローからシカゴに移った。彼女はグラマー・スクールを卒業していたので、ハイスクールに入学するのを楽しみにしていたが、シカゴのグラマー・スクールの1年間を修了するまでハイスクールの入学試験を受けることができなかった。その後、彼女はブラウン・スクール (the Brown School) の高校部に入学したが、2、3ヶ月で退学した。というのは、両親は、彼女が学校に行き続けるのをあまり喜ばなかったし、また、彼女自身も、その授業内容に知的興味がわかなかったからである。彼女の父親は正式な学校教育をほ

とんど受けなかったが、自分自身の努力で非常に聡明な人となった。母親もエラが学校に通い続けるのを決して励ましはしなかった。エラの兄と姉も正式な学校教育を継続したという証拠はない。

15歳の時、エラは、友人に誘われ、一緒に教員資格試験を受けた。彼女はその試験に合格したが、あまりにも若いので教師になることができないと言われた。そこで、シカゴ・ハイ・スクールの師範部 (the Normal Department of Chicago High School) に入学した。1860年代のカリキュラムには、算数、自然地理学、政治地理学、代数学、自然哲学、地図作成、合衆国史、合衆国憲法、化学、植物学、天文学、生理学、英文学、修辞学、教授理論、簿記、歌、描画などが含まれていた³⁾。1862年に卒業した時、彼女は17歳であったが、当時、同じ年頃の女性に比べて成長し自立していた。

彼女は、1862年春に卒業し、その秋、フォスター・スクール (Foster School) 初等部の教師となった。それから、シカゴ師範学校に新しくできた実習学校 (practice school) の校長 (1865年～1871年)、ハイスクールの数学教師 (1871年～1875年)、グラマー・スクールの校長 (1875年～1877年) という経歴を歩んでいった。この間、1868年にウィリアム・ヤング (William Young) と結婚したが、翌年に夫は亡くなった。27歳の時には、彼女の家族や親しい身内もすでに亡く、その情熱をひたすら教育に傾けていった。そして、1887年、42歳の時にシカゴの副教育長となり、12年間その職を勤めた。

彼女は、教師たちがカリキュラムに関する発言権を持つことを奨励した。また、教師の地位と影響力を高めるための集会を開き、そこからシカゴ教員連盟 (CTF) が誕生した。そして、この組織の最も重要な指導者であるマーガレット・ハレイ (Margaret Haley) は、ヤングの民主主義的な指導スタイルに非常に大きな影響を受けたのである。

後に詳述するが、1895年からヤングは、シカゴ大学のジョン・デューイのもとで聴講生として研究を始めた。そして、1899年、55歳の時、副教育長を辞職した。というのは、新しい教育長であるベンジャミン・アンドルーズ (E. Benjamin Andrews) (彼はブラウン大学の前学長であった) が、あまりにも独裁的で、保守的であったからだ。彼女は、デューイの指導のもとで博士号をとるための研究を続けた。彼女の学位論文「学校システムの孤立」 (Isolation in School System) は、経験的な学習、社会的な自由、民主主義的な学校共同体に基づいた教育哲学を反映していた。それは1900年に出版された。しかし、その後、タイトルは『教育への貢献』 (Contributions to Education) と変更され、彼女がシカゴ大学シリーズのために執筆した3冊の本の第1巻となった。他の2冊は、1902年の『学校にお

ける倫理』 (Ethics in School) と『現代教育理論のいくつかのタイプ』 (Some Types of Modern Educational Theory) である。

博士課程修了後、彼女は、シカゴ大学の教授として勤務し、後に、シカゴ師範学校 (その後、シカゴ教員養成大学 (Teachers College)、現在のシカゴ州立大学) の校長となった。1909年に、彼女はシカゴの教育長に任命され、合衆国の主要都市の学校システムを率いる最初の女性となった。教師訓練の改善、教えることを専門職と見なすこと、教師の責任の範囲を広げるとは、ヤングの主要な政策目標であった。彼女は、また、学校のカリキュラムに職業訓練や体育をとり入れた。1910年には、マーガレット・ハレイの助力のもと、全米教育協会 (NEA) の最初の女性会長となった。1913年にヤングは教育長を辞職したが、その後、再任命された。しかし、1915年には永久にその職を退き、1918年の10月26日にワシントンD.C.でその生涯を終えたのである。

II ヤングのシカゴ大学との関係の始まり

エラ・フラッグ・ヤングは1895年から1904年までシカゴ大学に在籍していた。1895年に、彼女は聴講生として研究を始めた。当時、シカゴ大学はジョンズ・ホプキンス大学に倣い、大学院を主とする大学として再出発したばかりであった。しかし、学長であるW.R.ハーバー (William Rainey Harper) はジョン・ロックフェラー (John D. Rockefeller) の援助により、すでに様々な分野において蒼々たる研究者を結集させていた。たとえば、光の速度を測定する実験装置を考案し、「エーテル (ether)」が存在しないことを証明した物理学のアルバート・ミッチェルソン (Albert Michelson)、『脳の成長と神経システムの生理学』 (The Growth of the Brain and Physiology of the Neurology System) の著者であるヘンリー・ドナルドソン (Henry Donaldson) である。彼は、心理学における行動主義の創始者、ジョン・ワトソン (John Watson) の学位論文を指導した人物である。

歴史学ではフェルディナンド・シェヴィル (Ferdinand Schevill)、ギリシア語ではポール・ショリー (Paul Shorey) などがいた。また、社会科学の研究水準も高く、レスター・ウォード (Lester Frank Ward) の高弟であるアルビオン・スモール (Albion W. Small) が、1892年にコルビー大学を辞職し、アメリカで最初の社会学の教授として着任していた。彼はシカゴ大学でアメリカの大学で初めての社会学科を設立した。それは大学と大学院で社会学の学位を与える世界で最初の学科であった。1895年には、スモールはアメリカで最初の社会学の定期刊行物である『アメリカ社会学誌』 (the American Journal of Sociology) を創設し、1925年ま

で最初の編集長を務め、また精力的にその雑誌に論文を書き続けた。学科長としての彼の指揮のもと、シカゴ大学の社会学科は20世紀初期の30年間、社会学の中心地となった。また、この時代に、スモールはアメリカ社会学会 (the American Sociological Society) の設立に助力したのであった。

ハーバーは、14歳の時にマスキングム大学(Muskingum College) から文学史の学位を得て、17歳でエール(Yale) 大学に入学し、大学院生となり、19歳の時にそこで博士号を取得する。その後、シカゴのパプテスト系のユニオン神学校(Union Theological Seminary) でヘブライ語の教師となり、1886年にエール大学に移った。そして、1890年のシカゴ大学創設時に初代学長として任命されたのであった。そして、1894年7月、ジョン・デューイは34歳という若さながら、シカゴ大学の哲学と心理学と教育学をあわせた、新しい哲学科の主任教授として招聘され、1895年秋学期からシカゴ大学教育学科が開設された。さらに1896年1月にデューイ実験学校が開校するのである。

1895年、ヤングは大学での研究に興味があり、デューイのゼミの一つで学生として登録することを決心した。この時、彼女はまだ副教育長としての仕事に追われ、フルタイムの研究は不可能であった。さらに、彼女はその時、50歳という年齢のハンディがあり、大学で研究することに躊躇していたことは以下の記述で明らかである。

私がデューイのコースに入るためには彼のサインした許可書を提示しなければならぬと言われた。私はコブホール(Cobb Hall)の長い階段を見上げ、若者たちの熱心な顔を見た。そして、その場所は、若者の場所であり、私が研究を始めるべきではないと確信した。私が去ろうと振り返った時、私の顔を知っていた若者が近づいてきて、私のためにデューイの所に行って彼のサインをもらってきてあげようと申し出てくれた。そんなふうにして、私は偶然にシカゴ大学に入学したのである⁴⁾。

ヤングがシカゴ大学で受講した最初のコースは、1895年秋学期の哲学2の倫理学入門であり、1896年の春には哲学11、論理学史を受講した。しかし、副教育長としての職務が多忙であったためか、それから1年間の中断があり、次の記録は、1897年の春にもう一つのコース、哲学32の論理学理論を受講したことが記録に残っている。このコースは秋のヘーゲル哲学45の演習へと続く継続的なコースであった。また、ヘーゲル主義的な見解に取り組む必要のある2つの演習にも登録していた。

哲学教授の一人は、デューイがシカゴ大学に来た時、ミシガン大学からシカゴ大学に来よう勧めたジョー

ジ・ハーバート・ミード(George Herbert Mead)であった。ミードは、ヤングに哲学17、ギリシアの知性の発達というコースを教えた⁵⁾。もう一人の教授はジェームズ・タフツ(James Tufts)であった。彼は、1893年12月にシカゴ大学のハーバー学長にデューイを哲学科の主任教授として推薦する手紙を書いていた人物であった。彼は、器具主義の倫理的概念のいくつかを発展させる上でデューイと共同研究した。そのタフツが、ヤングに哲学23、心理学との関係における倫理学を教えた。タフツ、ジェームズ・エンジェル(James B. Angell)及びミードはともに、シカゴ大学におけるデューイの哲学と心理学と教育学をあわせた新しい学科の中心的な役割を担っていた。

III ヤングとデューイの関係

1894年にデューイはシカゴ大学に着任した。この時、彼はすでに実践に応用して確かめたい一定の哲学的、心理学的着想をもっていたと思われる。これは、単に個人的な願望というだけでなく、その着想のまさに本質から生じていた。というのは、この着想は哲学的、心理学的な理論の一部であり、それを実際の活動において応用しながら、発展させたり、修正したり、検証したりするまで不完全な仮説にすぎないと考えられたからだ。さらに、その着想は包括的であり、狭い技術的な意味での実験室以上のものが必要であった。なぜなら、その実験素材は、人間の知識、理解、品性の継続的な発達であったからである。

シカゴに移って来てから、デューイのこの考えはますます刺激され強くなった。この時期、デューイの心理学的見解の形成と発展に重要な影響を与えたものの一つはシカゴ大学の同僚との緊密で集中的な共同研究であった。先述したジェームズ・エンジェルは、機能心理学を考案し、ジョージ・ミードは、幅広い生物学的な知識に基づいて行為心理学を発展させていた。シカゴ大学の関連学部にいるこれらの人々が、研究グループを形成し、精力的に活動していたのである。

さらに、デューイは、様々な研究クラブの構成員であり、大学院生や学部生を指導していた。彼は、また、イリノイ児童研究会(the Illinois Society for Child Study)や全米ヘルバルト協会(National Herbart Society)に参加していた。これらの人々との交流や共同研究の中で、デューイは、心理学や社会学の原理や原則を学びながら、彼の教育理論の基礎をしいに形成していったのであった。

そして、デューイは、全米初のPh. D.を出す教育学科(Department of Pedagogy)と附設の実験学校の開設に着手したのであった。シカゴ大学附属初等学校(以下、デューイ実験学校と称す)は、シカゴ大学において幼稚園から大学までの有機的な統一体としての

学校教育のシステムを成し遂げるという目的のために設置されたのである。

ロバート・L・マッコール (Robert L. McCaul) は、この時期のシカゴ大学を次のように述べている。

ハーパーは彼 [デューイ] に大学の学科であろうと実験学校であろうと強力な支援とほぼ完全な自由を与えていた。彼は、学長と多くの教員たちが諸学校と教職の改善に積極的な関心をもつ大学にいた。彼は教育を改革するために一人で闘っていたのではなかった。他学科の多くの同僚と学長自身が同じ目的に向かって努力し、喜んで彼を支援していた。その大学はまた、教師と教師連盟に手を差し伸べ厚遇し、[シカゴ大学と] 提携し拡張する特有な管理部を設置していた。そして、彼に刺激を与え、彼のアイデアを正しく理解し、彼の理論に挑戦する聴衆に近づく手段を提供していた。彼自身は聴衆を求めることに積極的ではなかったが、聴衆が彼のところに来たり、彼が聴衆のところに行ったりする制度的な構造を提供したのであった ([] 内は引用者)⁶⁾。

このように、当時、シカゴ大学のキャンパスにおける活気に満ちた雰囲気、ヤングのような教育者たちにとって魅力的に思われたのは当然であろう。では、ヤングはデューイのもとでどのようなコースを受講したのか。先述した哲学2の「倫理学入門」の他に、1895年から1896年の秋学期を見てみると、論理学理論、ヘーゲルの演習 (二度)、形而上学の諸問題、政治哲学の歴史、教育に応用された心理学、個人的な研究、ギリシアの論理学演習に登録している⁷⁾。

デューイによるゼミでのヤングの様子に関して、マクマニスによれば、その時、ゼミの一員であった学生が以下のように語ったという。

その時の彼女の印象は、まじめな学生であった。何が行われているのかに注意を怠らず、自分の見解をもち、それらを表現できた。後者の点で、私は彼女が通常のレベルを超え、いくぶん物事を管理する傾向があるように感じた。私は、彼女がデューイと知り合いであり、デューイはおそらく面識があるという理由で彼女に多くをまかせていることが理解できた。彼女は、物事を独り占めし、人を押しつける人、変化に富む退屈な話し好きの人ではなかった。彼女が言うことは素晴らしかった。言葉好きでもなく、死ぬほど退屈にさせるエゴイズムも全くなかった。あるとすれば、むしろ、我々を顧みないデューイと彼女のヘーゲル論議であった。私は、彼女の見解が授業の平均を「超えていた」ことはわからないが、ほぼいつも「前向きに取り組んで」いた。もちろん、彼女は、自分自身の見解を示し、他者の見解を自分

のものにはしなかった⁸⁾。

ヤングは前年の夏に博士の学位を授与されたにもかかわらず、最後は1901年の冬学期にも哲学50ギリシア論理学の演習を受講していた。これらすべてのコースは、デューイに関して取得したものであった。彼女の成績は、均一にAかPであり、デューイは彼女の成績表に成績をつける時、ほとんど判読できないような字で「すべて合格」と常に記していたようであったという⁹⁾。

デューイのヤングに関する評価は、下記、1915年のデューイからマクマニスへの手紙において述べられ、この手紙からデューイとヤングの関係を推察することができる。

私が主にヤング夫人から得たことは、まさに哲学的概念を経験に基づいた同等物に言い換えることであった。私は上手く言うには時間がかかり、ヤング夫人が私に戻してくれて初めて、私は自分自身のお気に入りの概念の意味や力を理解できた。私は彼女が学生であった時もさることながら、一人の同僚としてなおさら彼女との関係に委ねている。

私は、ヤングが哲学のコースから主に得たことは、一人格者としての生徒の知的手順に対する彼女の実践的、実験的信念と尊敬についての知的、体系的な正当化であったと思う。私は、彼女によってそれがとても強調されるのに気付いて初めて、私自身の論理的な理論のその側面を正しく認識したことを告白しなければならない¹⁰⁾。

この記述から、ヤングがデューイによる様々な講義を受けながら彼の教育に関する思想や理論に触れ多くのことを学んでいたと同時に、デューイが彼女のこれまでの教育的な実践経験の価値を認め敬意を示し、彼女からも多くのことを学んでいたことが明らかである。デューイはこの手紙の中で「彼女の経験は、彼女のマインドを閉じる代わりに、それを成長のためにより熱心により完全にさせた。彼女は柔軟性と開かれたマインドをそのままにはしておかなかった。つまり、彼女はそれらを涵養し、並外れた程度までそれらを身に付けるのである。」¹¹⁾と述べている。

さらに、彼女の教育者及び研究者としての資質に関して、デューイは「ある人と他者との関係の精神的諸習慣に対する影響に関して、ヤングほど習慣的に鋭い感覚をもっている者と誰にも会ったことがない。」と書き、さらに「生理学的ではない全ての心理が社会的であるという私の確信の深さが、主にヤングとの交流のおかげであると思っている... ヤングの教えるという経験は、物質的、有機的諸条件の精神的、モラル的影響の重要性を彼女に痛感させたと同時に、彼女は

心の中に非常に大きな信念、すなわち、思考という行為、反省という行為の信念をもっていた。」¹²⁾と彼女の教育経験を高く評価している。

IV 大学の教員として

1898年3月、デューイは、ハーバー学長に春からジャックマン (Wilbur Jackman) とヤングの二人が彼の学科で教えることを要望するという手紙を書いた。ハーバー学長もヤングがシカゴ大学で教員として働くことを望んでいた。それゆえ、シカゴ大学には1898年秋学期の「学校システムの役割についての研究 (A Study of the Parts of the School System)、教授法IB 32」をヤングが教える予定の記録が残っている¹³⁾。ジャックマンはデューイの要請を受け入れ、2、3年後に教育学科の学科長になったが、ヤングは、1898年にこの要請を断った。シカゴの副教育長の仕事をしながらシカゴ大学で研究することに加え、教員として教える余裕はなかったのであろう。しかし、ハーバー学長はヤングを招聘することを諦めなかったので、シカゴ大学には1899年冬学期の「教育における肯定的、否定的諸要因 (Positive and Negative Factors in Education)、教授法IB 33」をヤングが教える予定であるという記録が残っている¹⁴⁾。

1899年シカゴの副教育長を辞任した時、ヤングは旅行と勉強のため、一年間、ヨーロッパに行くことを計画していた。ヤングが出発する前夜、ハーバー学長は、彼女を大学の教員にする面接を行うために彼女のところに事務員を送った。彼女は、最初、その件を拒否したが、彼は再度、面談することを求めた。

ハーバー学長は、教育学部の正教授の職階を提供しようとしたが、ヤングは大学で何の学位も取得していなかったため、それを受け入れなかった。それゆえ、ハーバー学長は、彼女のために教育学の准教授に相当する講師という職階を提供し、また、学位のために一年間、勉強する機会を与えることを約束した¹⁵⁾。

彼女はこの要請を受け入れ、ヨーロッパへの訪問期間を短縮し秋学期の開始までにシカゴ大学に戻って来た。その後、一年間、彼女は、哲学と心理学のコースを学び、デューイのゼミで始めた研究を継続した。その年度の終わりに、彼女は哲学と教育の学位を授与された。

マクマニスによれば、ヤングはこの学位試験の様子を次のように語っているが、それは彼女の形式張らない性格を示しているという。

猛暑の日であった。私たちは、帽子とガウンを身につけ、目立つスタイルで長いテーブルの周りに座っていた。私は帽子をとって、テーブルの上が良いみたいねと言った。そしてガウンを外して椅子の背に

かけた。私の行為によって、その場の威厳を壊すけれども、少なくとも、恐れ多い委員会の長引く質問にはより落ち着いたのだった¹⁶⁾。

シカゴ大学の記録には、1900年夏にヤングが教育学科で教えたという記録が残っている。下記の表は、彼女がシカゴ大学で教えたコースのリストである。

表 1¹⁷⁾

1900年夏
教育学 4：教育における肯定的、否定的諸要因 教育学 5：学校システムの役割の研究 教育学 20：19世紀教育理論の根底にある諸原則
1900年秋は教えていない。
1900年から1901年の冬
教育学 11：実験的教育学
1901年の春は教えていない。
1901年夏
教育 5：初等カリキュラムの諸教科における特別な方法 教育 20：教育的な諸改革
1901年秋
教育 6：学習者の方法 教育 (大学院) 28：19世紀教育理論の根底にある基本的な諸原則
1902年冬
教育 7：レシテーションの方法 教育 29：教えることの監督
1902年春
教育 8：教科の方法
1902年の夏は教えていない。
1902年秋
教育と哲学の学科が共同で提供するコース 6：精神的な成長の方法 教育 24：芸術の方法の評価
1903年冬
哲学 51：ハイ・スクールにおける教えることと管理の諸問題 (哲学科で記載) 哲学 25：教育の心理学的基礎 (哲学科で記載)
1903年春
教育 (大学院) 6：初等学校の方法 教育 (大学院) 77：性質の評価
1903年の夏は教えていない。
1903年秋
哲学 81：教育の概要の準備
1904年冬
哲学 80もしくは教育 16：教育の古典

このリストで明らかのように、ヤングはシカゴ大学の教育学科だけでなく哲学科でも教えていた。そして、教育学科では学部と大学院の両方のコースを教えてい

たのであった。この中で最も受講生の多いクラスには36名の学生がいた。それらは1904年冬に哲学科と教育学科の共同後援で開講された哲学80もしくは教育16の教育の古典であった。そして、ヤングは1904年春にシカゴ大学を去ったので、これが最後の講義となった。

ヤングはシカゴ大学でどのような教師であったのか。マクマニスによれば、以下のように、魅力的で刺激的な教師であったという。

彼女は決して授業で講義するのではなかった。彼女には学生たちから引き出す特別な能力があり、論争中の問題において学生たちに態度を明確にさせた。彼女の質問で、彼女は、彼女の手中にある事柄の中心と最も深くそして、しばしばこれまでで予期しなかった学生たちの信念の両方に切り込んだ。しかし、その授業 (recitation) は、いくつかの問題の単なる討論ではなかった。それはむしろ、そのクラスの各自の貢献を伴う多面的なシンポジウムであった。彼女の刺激する力は、彼女の研究における各自への民主的な敬意と信念、あるいは、他の誰かが表現したように、各自に自分自身を信じさせる彼女の能力から生じていた。それぞれが最善を尽くすことを求められ、その主題を正当に取り扱う自分の力を感じた。このすべてが彼女の授業の激励からではなく、能動的な精神と気力のあるリーダーシップのもとで主題を広げながら、生徒たちをその主題から解き放たざるを得ない方法で主題を提供する彼女の能力から生じた¹⁸⁾。

V デューイ実験学校の総監督として

ヤングがデューイ実験学校の仕事を支援していた記録として、1900年の『初等学校記録』(*The Elementary School Record*) に記載されている¹⁹⁾。また、元実験学校の教師であったK.C.メイヒュー (Katherine Camp Mayhew) とA.C.エドワーズ (Anna Camp Edwards) 著『デューイ・スクール』(*The Dewey School*) には、「学校が大きくなるにつれて、より明確な部門組織、より明確なプログラムの議論があった。1901年に、総監督 (supervisor) としてヤング、校長としてアリス (Alice C. Dewey) が任命されたことによって、その傾向はさらに補完された。彼らのパーソナリティや諸方法は、個々の教師の自由を妨げることなしに、より知的な組織を取り入れるようなものであった。」²⁰⁾ と書かれている。

デューイ実験学校でのヤングの役割に関して、デューイは、マクマニスへの手紙で「私は絶えず彼女からアイデアを得ていた。もともとの管理上の弱点が明らかになった (主として、管理的な事柄に私が未

熟であったため) 後で、実験学校を再組織化する時に、Mrs. デューイとともに彼女の影響は支配的な諸要因であった。実験学校がより系統的に正確に運営されたのはこの二人のおかげである。この3、4年における目的と有効性の不正確さはなくなったのである。」²¹⁾ と書いている。

デューイ実験学校では学校の規模が大きくなるにつれ、「万能型の教師」から「専門型の教師」へと移行し、教員組織も部門制を採用するようになった²²⁾。それは当時の教員に対する厳密な管理システムとは全く異なり協同的な社会組織を基盤としていた。すなわち、教師には知的自由と知的責任に基づく協同が保障されていたのであった。以下、それについて論じる。

ヤングは、教師に明確な任務と期待を与えることが、彼らを束縛することではないということを端的に示した。さらに良い教育、良い授業にとって決定的なことは、教師たちが十分に尊敬され、お互いに素直な意見交換のできる環境を設定し、また自ら考え実験し、振り返り改善する機会を教師に提供することであると実証したのであった。

それゆえ、ヤングにとって協同は、自発的に他の誰かに従うこと以上を意味した。それは、異なる個人の知性を発揮し、社会的な能力を発達させる好機であった。それは、彼女が「協同とはもう1人の導きに自発的に従うこと以上を意味する。自己によって開始され創造的な知性で終結する一つの反応を通して、潜在的な諸能力を発達させることは、常にその操作を伴っている。」²³⁾ と述べていることから明らかである。

デューイは「私が自由と自由の尊重が諸個人の探究的、反省的過程への配慮を意味するということ、通常、自由として通用すること、つまり、外的な拘束からの自由、表現における自発性などは、思考の諸操作とそれらが結びつく時にのみ意義があると知ったのは彼女からであった。」²⁴⁾ と述べている。

もし教師が教育的な諸原理を理解しないならば、その原理に基づいたカリキュラムを開発し、教材や授業方法を工夫し、展開しようとしなければ、さらに観察し、思考し、試み、反省する習慣を形成しないならば、学校とカリキュラムの改善は不可能である。

教師にはデューイが「知的諸方法の統制」²⁵⁾ と呼んだ能力が必要であり、それは教師による実践的な技能の個性的で自立的な習得を要求する。それゆえ、教師教育は、単に直接的に実践的なこと、手引書通りの熟練に焦点化するよりも、教師の知的自由と知的責任に注意が払われるべきである。それが実際にデューイ実験学校で試みられていた。

デューイ実験学校において協同が真に何であるかは、総監督へのヤングの任命で前進した。そして、教師の知的自由と協同を促進するために、教師の実践報告に基づく教師会議が重要な役割を果たしたのであ

た。このようにヤングは、デューイ実験学校における学校の組織と管理面でデューイの教育的アイデアを支援していたことは明らかであろう。

さらに、ヤングがデューイ実験学校の保護者会にも参加していたという記述がある。1904年に保護者の一人が「保護者たちは、いくつかの点で学校の真の目的により精通するようにならなければならないと実感した。Mr.デューイ、Mrs.ヤング、Mr.タフツがとても親切であり、この3年間の間に保護者会のすべての会員に対して授業が開かれるようになった。その授業では、この学校の諸原理が教えられた。また授業の終わりには、質問をしたり、それに答えられたりする議論の機会が与えられた。」²⁶⁾と述べている。ドナテリは、この資料からヤングが実験学校で保護者との重要な連携役を果たしていたのではないかと推察している²⁷⁾。

VI 『初等学校教師』の編集長として

1900年7月にフランシス・パーカー (Francis Wayland Parker) の編集によって『コース・オブ・スタディ』(*The Course of Study*) という新しい教育雑誌が発行された。しかし、シカゴ学院が1901年春にシカゴ大学の教育学部として編入された後、その雑誌は1901年7月に『初等学校の教師とコース・オブ・スタディ』(*The Elementary School Teacher and Course of Study*) と改称された。

1901年第2巻第5号の後付けで、パーカーは、この雑誌が「教師、校長、教育長、および、保護者のために毎月、発行される80頁の雑誌であり、教育学部の学生のテキストとして使用されている。教育学部の各教師が月ごとに投稿し、すべての部門や学年で行われた活動の概略だけでなく、前月の概略がどのように実践で実施されたのかを示す批評も含まれている。これらの概略や批評は、子供たちの観察と取扱いにおける教師の専門家集団の理論と実践における見解を提供する上で価値がある。」²⁸⁾と書いている。

しかし、1902年春にパーカーが亡くなった。そして、その年の晩夏もしくは初秋にヤングがその編集責任を引き継ぎ、1902年10月の第3巻第2号から雑誌名はコース・オブ・スタディが省略され、『初等学校教師』(*The Elementary School Teacher*) となった。ヤングは、その号の「初等教育雑誌」という論説で「この雑誌の領域は教育学部教員による建設的な計画だけでなく、カリキュラムの題材、もしくは学校経営に特に注目している男性や女性のプロジェクトと成果も含みながら、いくぶん拡大される予定である。そして現代的な方向にそって、コース・オブ・スタディの諸問題、初期の発達段階にある精神の諸問題に取り組み始めている者たちの情報センターとなるであろう。」²⁹⁾と書き、また、「一つの教育的な問題に関わるすべての諸条件

を把握することは、漫然とした読み方で興味をもつことにより獲得されてきた多くの断片的な見解をもつことよりも、他の問題の解決においてはるかに価値のあることである。教師の方法は、教育の指導者たちによって与えられるデータが科学的に提供され扱われる時に科学的になる。」³⁰⁾と述べている。

デューイは、1902年11月の第3巻第3号の「シカゴ大学教育学科」という論説の中で「時々、心理的・社会的諸条件、成長の諸過程、実験学校と初等学校両方の実際のワークから引き出された記述、これらの諸原則が子どもたちに用いる題材の選択と使用において具体的な表現を見出す方法についての記述を公表することがこの雑誌のページで提案される。」³¹⁾と述べている。デューイがこの雑誌に関心を示していたのは明らかであろう。

ドナテリによれば、パーカーが編集長であった前後のこれらの雑誌を考察し、その論調は全く変わっていないと主張する者がいるかもしれないが、正確にはヤングがその編集を引き継いだ後、最初の二巻より多くの教育の心理学的アスペクトを扱う論文を含んでいた。しかし、その内容の大部分は、なお哲学的、社会的、もしくは心理学的な文書よりも方法論的であったという³²⁾。

しかし、ヤングは、望むような内容の論考でこの雑誌に寄稿する者たちを勧誘するのに困っていたようだ。寄稿者の中には、シカゴ大学教育学科の彼女の学生たちがいた。そして、当然ながら多くの寄稿者は、シカゴ大学の実験学校、シカゴ大学のいくつかの学科、特に教育学部の教員たちであった。なお、パーカーの時よりも多くの者たちが、大学以外の者であった。

たとえば、1902年10月第3巻第2号のイリノイ州立大学学長のデビッド・フェルムリー (David Felmley) 著「初等学校における園芸学 I」(96～102頁)、1903年2月第3巻第6号のコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジのサムエル・ダットン (Samuel T. Dutton) 著「素材の選択」(346～351頁)、1903年11月第4巻第3号におけるボストン師範学校のコリン・スコット (Colin Scott) 著「教室における表現のいくつかの条件」(168～177頁)、ペンシルバニア州カリフォルニア市州立師範学校のハーマン・ルーケンス (Herman Lukens) 著「第5学年の教室」(178～184頁)、ウィスコンシン大学教育学部教授のマイケル・オシエイ (Michael V. O'Shea) 著「教室における自己活動の一言、二言」(153～160頁)、1903年12月第4巻第4号のイリノイ州ディキエーター市の教育長であるエノク・ゲストマン (Enoch Gestman) 著「無能な教師たち」(229～231頁)、1904年2月第4巻第6号におけるペロイト・カレッジのガイ・トーニー (Guy Allan Tawney) 著「子供のモラル訓練について」(354～365頁) などである³³⁾。

ヤングは1904年晩春に大学を去るまで『初等学校教師』の編集を続けた。1904年5月、教育学科の新しい建物の竣工式の時、その祝賀行事のための様々なセレモニーと協議を記載したプログラムがハーバー学長に送られた。その中には、教育学科に寄稿された論文集の一部として「理論と実践の関係」についての論文を発表したことも記録されている³⁴⁾。その最後の寄稿で、ヤングはシカゴ大学を辞職したのであった。

註

- 1) 管見ではあるが、下記、拙著の論文のみである。
中野真志「ジョン・デューイとエラ・フラッグ・ヤング」学習活動研究会『教授研究』第21巻第1号、2000年、13～22頁。
- 2) Smith, Joan K., *Ella Flagg Young: Portrait of a Leader*. Ames, Iowa: Educational Studies Press, 1979, pp.4-5.
ヤングの来歴に関してはこの文献を参照した。
- 3) *Ibid.*, p.13.
- 4) McManis, John T., *Ella Flagg Young and a Half-Century of Chicago Public Schools*. Chicago: A. C. McClurg & Co., 1916, p.102
- 5) Donatelli, Rosemary V., *The Contribution of Ella Flagg Young to the Educational Enterprise*. Unpublished Doctoral Dissertation, University of Chicago, 1971, pp. 137-138.
- 6) McCaul, Robert L., "Dewey's Chicago." *The School Review*, 67 (Summer, 1959), p.267.
- 7) Donatelli, Rosemary V., *op.cit.*, p.142.
- 8) McManis, John T., *op.cit.*, pp.102-103.
- 9) Donatelli, Rosemary V., *op.cit.*, p.142.
- 10) McManis, John T., *op.cit.*, pp.120-121.
この手紙は、下記、「デューイ書簡集」(*The Correspondence of John Dewey*)の(07478)にも掲載されている。
The Correspondence of John Dewey, Vols.1-3, CD-Rom edition, Larry Hickman ed., IntelLex, 1992.
現在、この書簡集はIntelLex社の電子版のみ利用可能である。
- 11) *Ibid.*, p.120.
- 12) *Ibid.*, p.121.
- 13) Donatelli, Rosemary V., *op.cit.*, p.144.
- 14) *Ibid.*, p.144.
- 15) McManis, John T., *op.cit.*, p.110.
- 16) *Ibid.*, pp.110-111.
- 17) 下記を基に筆者が作成した。
Donatelli, Rosemary V., *op.cit.*, p.147.
- 18) McManis, John T., *op.cit.*, p.117.
- 19) John Dewey and Laura L. Runyon, (Eds.), *The Elementary School Record* [a series of nine

monographs]. Chicago: University of Chicago Press, 1900, p.153.

ここには、大学のアドバイザーとしてデューイとともに記載されている。

- 20) Katherine C. Mayhew and Anna C. Edwards, *The Dewey School*. New York, London: D. Appleton-Century, 1936, pp.371-372.
ここには「実験学校」(Laboratory School)の名がヤングによって提案されたという言説が含まれている(7頁)。
- 21) McManis, John T., *op. cit.*, pp.120.
- 22) デューイ実験学校の教員組織に関しては下記の文献を参照されたい。
中野真志『デューイ実験学校における統合的カリキュラム開発の研究』風間書房、2016年。
- 23) Ella Flagg Young, *Isolation in the School*. Chicago: University Of Chicago Press, 1900, p.22.
- 24) McManis, John T., *op.cit.*, pp.121.
- 25) John Dewey, "The Relation of Theory to Practice in Education," (1904), in Charles A. McMurry (Ed.) *The Relation of Theory to Practice in the Education of Teachers*. The Third Yearbook of the National Society for the Scientific Study of Education Part I (pp.9-30). Chicago: University of Chicago Press, 1904, p.11.
- 26) Nellie J. O'Connor, "The Educational Side of the Parents' Association of the Laboratory School: From A Parent's Point of View," *Elementary School Teacher*, Vol. 4.No.7 (Mar., 1904), p.535.
- 27) Donatelli, Rosemary V., *op.cit.*, p.152.
- 28) *The Elementary School Teacher and Course of Study*, Vol.2. No.5 (Jan., 1902), p.410.
- 29) Young, Ella Flagg, "Editorial," *Elementary School Teacher*. Vol.3 No.2 (Oct., 1902), p.139.
- 30) *Ibid.*, p.140.
- 31) Dewey, John, "Editorial," *The Elementary School Teacher, III* (November, 1902), p.203.
- 32) Donatelli, Rosemary V., *op.cit.*, p.152.
- 33) R.V. ドナテリ (Donatelli) の上掲書(157頁)をもとに『初等学校教師』を参考にしながら加筆した。
- 34) *Ibid.*, pp.158-159.

(2019年9月20日受理)